

山口大学教育学部・附属山口中学校連携の バレーボールマッチの実践と成果

齊藤 雅記*・上田 渉大**・戎 健介**

Cooperative Volleyball Match between the Faculty of Education at Yamaguchi University and Yamaguchi Junior High School Affiliated to the Faculty of Education at Yamaguchi University

SAITO Masaki*, UEDA Takahiro**, EBISU Kensuke**

(Received September 26, 2025)

本研究の目的は、山口大学教育学部附属山口中学校3年生と山口大学教育学部保健体育選修の有志学生が招待を受け参加し実施したバレーボールマッチ実施の成果を明らかにすることである。実際に参加した生徒の振り返りコメント、中学校教員へのインタビューを中心に扱い、バレーボールマッチ実施の成果について検討することを目的とした。その結果、中学校教員からのインタビューでは大学生とのバレーボールマッチには大きな意味があり、興味、交流、本気、肯定感といった視点でのバレーボールマッチ実施のメリットが多く出現した。生徒の振り返りでは、バレーボールマッチ当日だけではなく、バレーボール単元や体育理論との繋がりを実感し、人々を結びつけるスポーツの文化的な働きについて実感した様子がみられた。

1. はじめに

本研究では、山口大学教育学部保健体育選修有志と山口大学教育学部附属山口中学校3年生が実施しているバレーボールマッチの実践とその成果についてまとめたものである。バレーボールマッチについては、中学3年生事に実施するバレーボール単元と体育理論領域「人々を結びつけるスポーツの文化的な働き」とを関連づけバレーボール単元末に実施されるものであり、単なる競技力の向上・競争を目指しているものではない。異年齢世代とのバレーボールマッチを通して、「する」「知る」「見る」「支える」などの多様なスポーツとの関わりについて実践的に学ぶことを狙いとしている。また、スポーツを通して年齢や性、障害などの違いを超えて交流するものであることを実際の体験として感じることも目的としている。本研究では、実際に参加した生徒の振り返りコメント、中学校教員へのインタビューを中心に扱い、バレーボールマッチ実施の成果について検討することを目的としている。

1. 1. バレーボールマッチの実施方法・ルール

バレーボールマッチについては、中学3年生時に実施するバレーボール単元と体育理論領域「人々を結びつけるスポーツの文化的な働き」とを関連づけバレーボール単元末に実施されるものであり、山口大学教育学部で体育科教育学を専門とする教員が招待を受け、保健体育科教員を志望する学生有志を集め参加している。バレーボールマッチには中学3年生学年全員（4クラス12チーム）と大学チーム（2チーム）、中学校教員チーム（1チーム）計15チームで構成されており、3コートにわかれ5チームの総当たりで実施する。年度によっては、すべての試合終了後に大学生対中学校教員や、大学生対バレー部、大学生対選抜チームなどのエキシビジョンゲームも実施した。令和4年より毎年開催しており、4年間の開催時期は次の通りである。

1年目：令和4年12月16日

2年目：令和5年9月22日

3年目：令和6年7月16日

4年目：令和7年7月15日

バレーボールマッチの試合のルールは基本的なバレー

* 山口大学教育学部, 〒753-0841 山口市吉田1677-1, mask@yamaguchi-u.ac.jp ** 山口大学教育学部附属山口中学校

ボールのルールで実施した。男女混合チームで行うため、ネットの高さは女子高さを基準とし、サーブミス、サーブレシーブミスでの点数が入ることを防ぐため、またレシーブの難易度を下げ3段攻撃に繋がりやすくすることをねらいとしてサーブは手での下投げとした。

1. 2. 体育科教育学を専門とする大学教員の狙い

バレーボールマッチへの参加依頼を受け、有志学生を募集している。その際には、次の3点を意識し、数回の練習を通して。以下の内容については中学生へ示すことはしていない。

- ①3段攻撃や、レシーブ、最後までボールを追いかけるような中学生で学習する基本的動作を見本として示すこと。
- ②手を抜かないことで真剣にスポーツを楽しむ姿を見せる。中学生との試合で力の差があったとしても手を抜かずしっかりと勝つ姿を見せる。
- ③大学教員と大学生が性別や年齢関係なく一緒に楽しむ姿を見せる。

2. 方法

本研究の目的を明らかにするために、以下のデータを収集する。

①中学校教員へのインタビュー

インタビュー内容として、バレーボールマッチの意義やバレーボールマッチでの生徒の姿・大学生と行う意義をフリートークとして会話した内容を整理した。

②参加中学生の振り返りコメント

生徒のバレーボールマッチ終了後に「スポーツのもつ人々を繋ぐ力」についてまとめてください。といった課題を課し、特徴的なものを抜粋した。ほぼ全て本文ままであるが、文章の繋ぎのためなど、一部抜粋・編集している。

3. 結果・考察

3. 1. 中学校教員へのインタビュー

表1は、中学校教員へのインタビューの内容である。表1で示すように、ほぼ全てがメリットであり、デメリットは時間割調整、日程調整の手間と、会場となる体育館と武道場の距離が遠く、それぞれの会場間の移動ができず、同じクラスのチームでも試合を見れないことがあるといった事務的・物理的なものが挙がるに留まった。

メリットとしては、様々なものが挙げられたが、まず挙げられたのは①であった。普段の体育では見られない、体験できないレベルのバレーボールを体験することで、自分たちの学習していく先がどのような姿になるのかが

より実感できるのではということであった。高いレベルというのは技能的な部分も勿論だが、⑨のように男女混合、異年齢でスポーツを楽しむ姿も印象的に残っているようである。年度によっては男女共修での体育の実施率や男女間の交流の多さに差があるが、男女共修を嫌がるような年度でも大学生の姿を見て、男女共修が学校生活だから無理やりやらされているのではなく、スポーツを行ううえでの普通の姿なんだと理解していく様子が見られたとのことだった。

メリットの内容でいくつかの視点で分類してみると、バレーボールマッチをきっかけにバレー自体に興味を持つ姿がみられた(①、⑦、⑧)。応援や運営での交流の充実(②、④、⑩、⑪)。本気でやるからこそその技能の上達(④、⑩、⑪)。バレーボールマッチ全体を通しての肯定感(③、⑪)。以上のように、興味、交流、本気、肯定感といった内容で分類することができると考えられる。また別の視点として、バレーボールマッチの影響が体育祭実行にも影響を与えているのではないかといった内容もあった。

3. 2. 参加中学生の振り返りコメント

表2は、生徒のバレーボールマッチ振り返り課題の内容である。図1は実際の書かれた課題の例である。生徒の振り返り内容で多く記述がみられたものに、「本気」というキーワードがある(②、③)。「本気」でやるからこそ、スポーツが楽しめるといった「楽しむ」といった視点では「本気」であることが重要だというまとめがみられた。加えて多くみられたものには「交流」の視点がある(②、④、⑤、⑥)。「本気」でやることは、中学校教員もメリットとして捉えていたことであり、さらに参加した体育科教育学を専門とする大学教員と有志参加した大学生チームの狙いの1つにも本気でやる姿を見せるというものがあつた。そのような狙いが生徒にも言葉ではなくプレースタイルで伝わっていたのではないかと考えられる。また、「交流」の視点が多くみられていることは、「本気」と同様、中学校教員もメリットとして捉えていたことでもあり、さらに体育理論領域「人々を結びつけるスポーツの文化的な働き」の視点を充分に感じ取っていたと考えられる。

表1 中学校教員へのインタビュー内容

<p>メリット</p> <p>①大学生と実際に試合することを通して、大学生の高いレベルを目の当たりにすることができた。バレーボールマッチ後も体育館でバレーをやる様子や学外施設を借りてバレーボールをする様子がみられた。</p> <p>②大学生という異年齢との交流がみられた。いざ交流しなさい、としてもなかなか交流できるものではない。スポーツという共通の活動があるからこそ交流が発生している。</p> <p>③運営面でも大学生が意図を汲んで動いてくれるから運営面でのスムーズさが生まれ肯定感が生まれている。</p> <p>④大学生に勝つという目標のもと練習している。そのため、試合中は他のクラスやチームでも得点を取ったり、良いプレーがあると盛り上がる（集中して試合を観戦している）。</p> <p>⑤教員志望の大学生がいることで大人数のバレーボールマッチでも怪我や事故の視点からリスクマネジメントができる。</p> <p>⑥体育祭のテーマ「LINC-fes」。これはLife（人生）、Inspiration（感動）、Navigation（人生の方向性）、Challenge（挑戦）の頭文字をとったものになっている。バレーボールマッチのテーマ「人々を結びつけるスポーツの文化的な働き」が影響を強く与えているように感じている。</p> <p>⑦バレーボールマッチ開催時期がネーションズリーグや世界バレーと重なっているため、バレーボール自体に興味を持ち、プロのバレーボールを見るような生徒が増加している。</p> <p>⑧バレーボールマッチでバレーに興味を持ち、高校で専門を変えてバレーボール部に入る生徒もいる。</p> <p>⑨男女混合の視点、価値観に変化がみられる。大学生チームは大学教員含め異年齢男女混合が当たり前で楽しんで試合に臨んでいる様子がみられる。中学生にとって、ある種無理やり男女混合でやっている体育という考えから、当たり前前にスポーツを男女混合でできるという視点の変化がある。</p> <p>⑩普段の授業に比べ技能重視の授業を展開している。本気で技術の向上に取り組む環境になるため、本気の活動を通して生徒がサポートし合える関係に成長している。</p> <p>⑪苦手だったり、周りにあまり見られたくない生徒もいる。苦手でもやらざるを得ないが、やってみたら周りが応援してくれたり、褒めてくれる。実際にやってみたら苦手意識があったが、技能が伸び上達を感じられる。</p> <p>デメリット</p> <p>①日程（時間割）調整と会場のキャパシティの課題</p>

3. 3. スポーツ教育モデルとの関連

学校体育プログラムのために開発された「カリキュラム」「学習指導」のモデルとしてスポーツ教育モデルがある（シーデントップ・高橋、2003）。スポーツ教育モデルは、子どもたちを「有能で、教養があり、情熱的なスポーツ人」として育成しようとする狙いがある。有能なスポーツ人とは、満足のいくかたちでゲームに参加できる技能をもち、プレイの複雑さに対応した戦術を実行することができ、さらに、豊かな知識を身につけたプレイヤーを意味する。バレーボールマッチの単元を通して、「本気」でバレーボールに取り組むことでバレーボールを楽しむ技能が高まっていった生徒の姿がみられた。教養があるスポーツ人とは、スポーツのルール、儀礼、伝統を理解し、重んじるとともに、子どもたちのスポーツであれ、プロスポーツであれ、よいスポーツ実践と悪いスポーツ実践とを見分けることのできる人間を意味している。バレーボールマッチでは、生徒全員が運営面で協力する様子や、各々がリーダーシップを発揮する様子、バレーボールマッチの運営を円滑に進める様子がみられた。情熱的なスポーツ人とは、スポーツ事態の文化を維持し、保護し、発展させるような方法で参加でき、行動

できる人間をさしている。生徒の振り返りの中では、バレーボールマッチがただの単元として完結しているわけではなく、スポーツそのものやバレーボールの魅力を実感する様子がみられた。バレーボールマッチやその振り返りを通して生徒たちはスポーツ教育モデルの目指す、「有能で、教養があり、情熱的なスポーツ人」に近づいたと考えられる。このように生徒が変化したのには、制度化されたスポーツに独特の意味を与える特性がバレーボールマッチを通して含まれていたからだと考えられる。今回のバレーボールマッチで主に含まれていた特性には、「シーズン制」、「チームへの所属」、「公式試合」、「クライマックスのイベント」、「祭典性」がある。バレーボールマッチ当日だけではなく、バレーボール単元や体育理論の授業を通して、長いシーズン制でバレーボールに触れ続け、バレーボールマッチはクライマックスのイベント・公式試合の役割を果たしていた。さらに固定されたチームで継続して練習し続けバレーボールに関わり続けていた。このような姿が、生徒たちが「有能で、教養があり、情熱的なスポーツ人」に近づいた要因であると考えられる。

4. まとめ

本研究の目的は、実際に参加した生徒の振り返りコメント、中学校教員へのインタビューを中心に扱い、バレーボールマッチ実施の成果について検討することを目的とした。その結果、中学校教員からのインタビューでは大学生とのバレーボールマッチには学習しているバレーボールのゴールの姿を見せることができる大きな意味があり、さらには興味、交流、本気、肯定感といった視点でのバレーボールマッチ実施のメリットが多くみられたとしている。さらに、バレーボールマッチの実施がバレーボールマッチに留まらず、体育祭のテーマ等にも影響を与えているとしている。生徒の振り返りでは、バレーボールマッチ当日だけではなく、バレーボール単元や体育理論との繋がりを実感し、人々を結びつけるスポーツの文化的な働きについて実感した様子がみられた。これには山口大学教育学部附属山口中学校3年生と山口大学教育学部保健体育選修有志が参加しているバレーボールマッチにスポーツ教育モデルの要素が含まれ、スポーツ教育モデルの目的にせまったことが1つの要因として考えられる。

参考文献

シーデントップ (2003) 高橋健夫ほか訳：新しい体育授業の創造：スポーツ教育の実践モデル。大修館書店。